

桑港より（三月廿一日夜）

四十

春とは云へど桑港の今日この頃は、毎日の雨にて、まことに寒く候。御かはりもあらせられず候や、御伺申上候。こゝの貞一樣、いまもうすもの一枚にて德利をいじり居り候、私はガスストーブのそばでも一寸と寒くて、外套をひつかけて居るのに、寒くありませぬかと云へばトボケた顔をして足をふみのばし、お盆にのせたビスケットは今にもチャブ臺から落されさうに候。

雑誌毎度ありがたく候、時流の外に超然として穩當な態度、學術的のもの多きと、すべてが學校先生的にまじめなるとは、特色に候、ナマグサ坊主の仲間入り、何だかキマリが悪いやうに候。（中略）

老師は十二日桑港出發、シカゴ、紐育を經、

二十四日の船にてロンドンにゆき、獨、佛などの漫遊を終へて印度に再遊し、本年中に歸朝の筈に候、私は當港にとゞまりて佛教會のことと輔佐し、傍らすきなことを學ぶ考に候。からだはどうも丈夫でなくして金もうけ覺束なく候。中村先生へもよろしく、昨夜同先生と職員室にて御話せる夢を見申候。乍末筆奥様へよろしく御願申上候。

眞宮さんのうたはまことにむつかしさうたにて候よ、私は竹柏園流の体をすきにて候、つまり景物多からずして、眞情のみすら～としらべとやこうりなきをすくにて候、この頃の日課は、詩文と文典と修辭學にて候。早々

亞米利加より再び

（三月廿二日午後）

昨夜書いたのを投函せぬうちに、今朝御玉章に接

し申候、梅花一輪食卓にはんべりてこの一碗の珈琲まことに甘露よと味ひ申候。細々との御たよりうれしくてくりかへし／＼拜見いたし候。

私は當分この家に居る考に候。主人死后マダムの妹同居することになり、どうしてもボーアが一人入用とのこと、新たなる苦境を探る勇氣もなき折から、しばらくひそむこと、いたし候。

中々お轉婆なるミツスにて、今も御てがみの上封をながめ、千崎さん、折々帽子を二つかぶります

ネーのこと、MrとRevとどつちか一つにて事足るとの意にて候はん。そんなことはどうでもよい、早く息子さんを養ひなさいと云ふてやり申候、息子さんは猫のことによく、traxとBoyとの二匹を寵愛して、食後はいつもそれを相手に半時間をくらすことにはいふて、マダムは當分のうち悲哀に沈むことな

らん。この頃はなぐさめを佛教にとらんとして、色々のこと尋ね候まゝ、覺束なき言葉にある時は二三十分の説教を試むる時も有之候。しかし幼時より染みこみし個人主義といふ毒氣は、中々ぬけさうもなく候。この國のレデーなるもの、大乗佛教などのわかる器にあらずと存候、僞善道具や、自分の玩弄物として宗教をいちり居るが多く候、私このまゝ直言せるに、ヤツキとなりて辨護せるは、饒舌なるミツスに候。しかしこの國のレデーの、老いてます／＼元氣よく、浮世の荒浪と奮闘するは、勇ましく見うけられ申候、日本の女性が嫁となりて $\frac{1}{4}$ の元氣を失ひ、母となりては依頼心ます／＼強くなり、こゝにも $\frac{1}{4}$ を失ひ、後家となりては $\frac{2}{4}$ を失ひつくして全くゼロとなるやうなものにては無之、流石生存競争

の酸苦にきたへたる國人だけありて、島國の吾等にはほめてやりたき想有之候。こゝのマダムなども、主人の事業（受負事業）を人手にやるは惜しいとて、女だてらに繼續して富をつくり居り候。しかし金がないと人でないやうなはげしき國故、あたり前のこと、島國とても今十年後には自然にこの種の悪い元氣がさかんとなるべく、それと同時に個人中心の我見説、その毒をながすことあるべしと、株香くさき頭脳にはまことに寒心のいたりに候。

いかにして活きてゆくかとの問題のために、一生を戦ひくらすなり、文明の外皮をきたる野蠻人にあらざるか博愛をとゞき献身をとく書物はいたることこの店頭に、山の如くつまれあれど、眞個の仁義を解するはこの國人には多からずと存候。私は

このみで戰國策をよむものに候が、いまの世界といふものも、六國相反目した當時とすこしもかはり無之、孟子や孔子のやうな、さけびが必用に御座候……例の頑固なる流義御一笑被下度候。金門公園に、加洲に在留する獨逸人が桑港市へ贈るものとせるゴエテ、シルレルの銅像これあり候、その下の芝生は私のいつも詩集を携へてねころぶ處に候が、獨逸人のみやびたる誇りにて敬服しては居るものに候、在米日本人には銅像たてるほど金を集め得るや否やは、第二として、日本の贈物で候とて、この國に語るやうなものは何だろうと思ふと心細くも相成候、本國なる印度にては僅かにその痕跡をとゞめ、紹介國なる支那にて舊夢のあとをのこすばかりなるわが大乘佛教こそ、無形の銅像、無形の賜ものなれど、深く祈願をこ

らすことも有之候。

變化さだまりなき人事の改良進歩といふうちは、かゝる種類の時來れば自ら出来るやうなもの、宇宙と人生との大なる關聯にいたりては、玄妙なる因縁あるにわらざれば出來がたきものかと存候。私自身は島國の片田舎の園丁として、一生の運命をさだめ候。必ずこの國に眞の福音をつたふるものあるやうにつねにいのり居り候。今日はどうしたものかこんな手前味噌を書きはじめ御笑ひの程も恥しく候。梅花の御返禮にもと、唯々ガーデンをそぞろあるきせしも、毒々しき色の花のみにて、とても白梅とはくらべがたく、寧ろもつて居るもの、うち一番大事なものをさしあげんと存候て、花ピラ一枚さしあげ申候、一日幼兒として教へし子の去年就學せるもの、一は四才の幼兒、「先生早く御かへ

り」とてがみの由、本字は姉か兄かの筆に候、そのわからぬところ面白く候はずや、かゝる種類のもの晴着のぼけとに一ツぱいつめ置候、天涯落魄の身、どこで死んでもこれ等ははなしがたきものに候、この頃右二人から別のもの來り候ま、これはさしあげ申候かしく

先月十七日の夕、この書面に接し、さらば又返信を物せんかと思ひ居りし二十日の朝、新聞紙は彼の地の震災の慘状を報じ越し。慘害に脳める人、何れ誰れ彼れのけぢめのあるべくもあらざるべけれど、わけても、教の道の爲め、さのみ健ならぬ身を以て、他國の人の家に寄寓して慣れぬ仕事に身を委し居らるゝ彼の人の安否の程もげに如何あらんと心もとなく思はれて